

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00831

研究課題名(和文)外国語学習版オーラルヒストリー研究：アジア地域で活躍するグローバル人材を中心に

研究課題名(英文)An Oral History Approach to Foreign Language Learning: Focusing on the Globally Competent Human Resources

研究代表者

寺西 雅子(那須雅子)(Teranishi Nasu, Masako)

岡山大学・全学教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：50311098

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、オーラルヒストリーの手法を援用して、日本人に相応しい英語学習法の特定を目指したものである。特にアジア地域においてグローバル事業に携わって活躍する日本人の中から、英語を中心とした高度な外国語運用能力を活用している社会人にインタビューを行い、英語学習とその活用までに至る口述記録を調査した。日本人が多様化するグローバル社会を生きる上で必要な学習内容と有効な英語学習法を提案するために、インタビューから得られたナラティブ分析の成果を、国内外の教育関係者や研究者とともに、ウェブサイト、書籍出版、シンポジウム開催などを通じて一般社会へ還元するために積極的な発信を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

個人の学習者に焦点を当て、個から全体を再構築しようとするオーラルヒストリー研究の手法を語学教育に応用することによって、長期的な学習履歴の分析を蓄積し、外国語学習に見られる一定の汎用的要素とともに、環境や特性、ニーズに応じた複数経路が存在する有様を詳細に記述することができた。また、多国籍化する英語を受け入れてアジア地域で活躍する日本人のナラティブ分析から、生涯にわたる包括的活動としての英語力の養成という観点から、経験と学習の複雑性および多様性を提示した。このような質的研究の蓄積は、多様化する学習者の環境を視野に入れることが求められる日本の英語教育界への貢献であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to identify suitable circumstances of learning foreign language especially for Japanese people, using oral history methods. The study focused upon Japanese global talents who are widely working around the Asian countries and using their advanced foreign language skills, particularly English. They were interviewed and their English learning experiences and application to practical situations were closely investigated.

The results of the narrative analysis obtained from the interviews were actively disseminated to the society through a website, book publication, and symposia, together with educators and researchers in and outside Japan, to propose learning content and effective English learning methods necessary for Japanese people to live in a diverse global society.

研究分野：第二言語習得、英語文体論

キーワード：第二言語習得 英語教育 オーラルヒストリー ナラティブ研究 インタビュー 英語学習成功者 質的研究 ライフストーリー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

平成 26 年度に文部科学省の「スーパーグローバル大学創生支援 (Top Global University Project)」事業がスタートし、グローバル人材育成のために 10 年間にわたる大規模な取り組みが日本各地の大学で本格化した。グローバル人材に求められる様々な要素のうち「語学力・コミュニケーション能力」は必要最低限と見なされ、小学校から大学まで英語教育強化のために様々な取り組みが行われている。このような社会的背景において、高度な英語力を駆使できる人材をいかに継続して育成するのかという研究や取り組みが期待されてきた。

本研究の学術的背景として、英語学習の実態を把握しその効果を測るには、大学入学以前の英語学習の積み上げや卒業後の取り組みを総じて考慮する必要性、また教師が指導する授業時間以外の学習状況をも考慮することの重要性が挙げられた。個人の英語学習の実情を、数値によって示すことには限界があり、またアンケートやデータなどの量的研究では全体が平均化されるため最も参考にすべき貴重な成功例が埋もれてしまうことから、本研究の背景には、英語学習を生涯にわたる包括的活動として質的に捉え直すべきであるという理念があった。

今回は、特に研究対象者として、アジア地域で活躍するグローバル人材に焦点を当てることとした。英語のノンネイティブであるアジア人が、ネイティブ英語に気後れすることなく高度な英語を使いこなしている事実から参考にすべき教育法や態度は多々あると考えられたからである。本研究では、広域言語としての英語の多様性を受け入れてアジア地域で活躍する日本人を対象とし、その英語学習に関わる「オーラルヒストリー」調査を通じて、今後の社会を担うグローバル人材の育成にとって不可欠と考えられる英語習得の詳細な道筋を示すことを目指した。

2. 研究の目的

本研究では、特にアジア地域において現役グローバル人材として活躍する日本人の中から、英語を中心とした高度な外国語運用能力を活用している社会人にインタビューを行い、英語学習とその活用までに至る口述記録を研究対象とした。本研究の目的は、高度な英語力を駆使できる人材をいかに継続的に育成するかという問いに対して、具体的な成功事例を示すことであった。これまでの研究では大学生や大学院生を対象とした調査が主要であったが、本研究では社会人をインタビュー対象とし、高レベルの英語力を身につけ実際に活用できるまでの道筋を詳細に解明することを目的とした。

これまで筆者が継続してきた英語学習者のオーラルヒストリー研究の一環として、挑戦的萌芽研究「英語学習版オーラルヒストリーの編纂：生涯的な外国語学習法に関する質的研究」(平成 25 年～27 年度)の成果から、更なる問いを設定し研究を開始した。すなわち 40 件以上の学習成功者のインタビューデータの蓄積とその学習成功事例の整理から、学校教育期間からその終了後を含めた長期間を視野に入れた場合、日本人が標準的な学校教育からスタートして実際に社会で高度なレベルの英語力を活用できるまでの道筋とはどのようなものであるか、という学術的な「問い」が生まれた。通常、日本人は小学校から大学までの期間を経て就職し、社会に出た後も語学学習は継続されるものである。この長期間の道のりは画一化された道筋ではないにしても、あるいは、一般化や抽象化は困難であるにしても、いくつか一定のパターンや類似する傾向を見出すことが可能であるという仮説に立ち、具体的な事例の考察を行うことを目指した。そして、さらに考察のプロセスにおいては、新たな視座を発見したり、視点を拡張したりするなど、第二言語習得における質的研究の知見を深めることが期待された。

3. 研究の方法

本研究の方法として、歴史研究分野において広く用いられる「オーラルヒストリー」-「口述史」・「聞き書き」により、個人の証言に焦点をあて、個人史から全体史を再構築しようとする比較的新しい研究手法-を援用した。インタビューを通じて個人の外国語学習者の経験を聴きとり、それらを文字データに書き起こしてテキスト分析を行うという手法を採用した。分析方法としては、時間軸を取り入れた学習履歴の分析が可能になるフレームワーク(複線経路・等至性モデリング(Trajectory Equifinality Modeling : TEM))を応用し、学習体験を整理するという方法を考案した。この手法は、質的心理学、文化心理学の分野で開発されたものであり、時間の経過と人間の成長について全体的な理解を試みようとするものである(サトウ・安田:2012; 2017)。オーラルヒストリーでは、文字データをテキストとして詳細に精読することを通じて、それらを包括的な視点から丁寧に記述することを目指す。時間的変化を様々な学習活動や環境との関係で展望しながら、複数の異なる経路を通ったとしても同じ到達点(英語力を活用して海外で業務に携わること)に達することを可視化し、またその経験の多様性や複雑性を提示することを可能

とするモデル図の作成を行った。

まずは、収集した 40 余りのインタビューによる履歴データの中から、アジアで活発にビジネス展開を行っている日本人 1 名のデータを抽出し、その学習経過と実践までを詳しく記述することから、モデル図を作成した。この個人の複数回にわたるインタビュー調査では、家庭環境から学校教育までの段階、そして卒業後にアジア地域において外国語（英語と中国語）を用いてグローバルに活躍をするという、文化的、社会的背景からの諸事情を語学習得に関係づけながら、時間軸に沿った学習経験の深みや広がりを可視化した。グローバル社会に生きようとする日本人学習者の人生の包括的な理解という観点から、時間的な経緯を考慮にいれて、全体的な理解を試みた。続いて複数データの分析へと移行し、日本の学校教育を受けたのちに国内で就職し、その後、アジア地域において英語を用いた業務を遂行するという、同じような経歴を持っている日本人 4 名のインタビューを実施して、経験の多様性の幅を捉える分析を行った。

4. 研究成果

2018 年度は、まず、オーラルヒストリー研究の利点を活かす分析フレームワークに関する文献調査を重点的に行った。そして、時間軸を取り入れた学習履歴の分析が可能になるフレームワークを考案した。これまで収集したインタビューによる履歴データの中から、半数程度を抽出して解析を完了し、時間軸を明らかにする学習モデル図を作成した。また、アジア地域で活躍するグローバル人材を対象に 2 件のインタビューを行った。1 件目は、台湾で中国語を習得し、現在はメディアを中心に活躍する女性へのインタビューを行った。2 件目は、これまですでに 2 回のインタビューを実施していた K 氏に対して、3 回目のインタビューを行った。アジアでビジネスを展開する K 氏のインタビューに関しては、3 回分のインタビューデータを用いて詳細分析を行った。また、韓国で開催された教養教育に関する国際フォーラム 2018 International Forum on Liberal Education に参加し、韓国、中国を中心とするアジア地域における大学の教養教育の最新動向について情報収集した。

成果発表として、日本国際教養学会第 8 回全国大会において、ポスター発表「オーラルヒストリー研究：アジア地域で活躍するグローバル人材に必要なとされる「能力」について」を行った。学術誌『PERCICA』No.46 に、研究ノート「オーラルヒストリーによる外国語学習法に関する質的研究：アジア地域で活躍するグローバル人材のインタビューからの考察」を発表した。

2019 年度は、時間軸を取り入れた分析フレームワークを用いて、昨年度に続き複数の学習モデル図を作成した。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、活動が制限されたため、予定していたインタビュー数件の実施を 2020 年度に延期し、成果発表についても状況を見ながら、開催時期を改めて検討することとなった。研究実績としては、下記 3 点にまとめることができる。(1) 日本人 1 名と台湾人 1 名のインタビューを行った。(2) 集積したインタビューの分析状況として、複線径路・等至性モデリング(Trajectory Equifinality Modeling: TEM)を応用したフレームワークを基に、学習モデル図を作成した。(3) 成果発表として、日本国際教養学会英語教材プロジェクトチームのメンバーとともに、『大学生のための国際教養』 Intersection of Arts, Humanities and Science: Fifteen Selected Passages for University Students.を成美堂より出版した。その中で、アジアで活躍するビジネスマンのインタビューに基づき、グローバル人材に必要なとされる「教養」について述べる英文テキストを掲載し、学生による自主的活動を促す Further Study を提供した。口頭発表「日本人の語学習得に関する質的アプローチ：英語学習履歴のナラティブ分析と考察」を行った。本科研の成果を掲載する WEB サイトを開設した。

2020 年度には、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて活動が制限されたため、アジア地域において活躍するグローバル人材を対象とするインタビューを予定していたが、実施を延期することになった。そして、年間を通じていずれのインタビューも対面では実施することができなかったため、遠隔 Web 会議システムを用いることによって、インタビュー 1 件を実施した。成果発表についてもエントリーしていた国際学会の開催が見送られるなど、コロナによる影響を受けて学会出張をすべて取りやめたが、オンライン開催による学会において、成果発表を行うことができた。また、これまでにインタビューを実施したグローバル人材を講演者として招き、オンラインによる講演会を一般公開にて開催した。研究実績としては、下記 4 点にまとめることができる。(1) 遠隔 Web 会議システムを用いて、グローバル人材を目指す高度な英語力を習得した学習者を対象にインタビューを行った。(2) オンライン開催の学会にて、口頭発表およびポスター発表を行った。(3) 成果発表の一環として、日本で活躍するグローバル人材を招聘し、一般公開の講演会 1 件をオンラインにて実施した。(4) 本科研の研究成果を掲載する WEB サイト

の更新を行った。集積したインタビューの分析・考察を継続し、学習モデル図を複数作成して掲載した。

最終年度の研究成果として、3点にまとめることができる。まず、(1)『ナラティブ研究の実践と応用：現代社会への理解と貢献に向けて』(2022)を出版した。本書は、ナラティブ研究の理論と実践例を集め編纂したものである。学習者のナラティブに焦点を当てた第2部において、本科研テーマの研究成果である外国語学習の成功者に対するインタビュー調査から得られた知見、およびアジア地域で活躍するグローバル人材のインタビューから得られた示唆について執筆し、広く本研究の成果を一般社会に還元することが達成された。同書には、アジア人材へのインタビュー分析からグローバル人材に必要な能力を論じた寄稿、およびグローバル人材とアジア留学に関わる論考や、本科研の研究分担者によるアジア方面と欧米方面への地域差による留学の比較に関するコラムを併せて掲載することができ、本研究テーマをより広範囲にわたって発信する成果物となった。また、(2)科研成果発表会(オンライン)を一般公開で開催し、外国語教育の研究者のみならずナラティブ研究の専門家が参加した。発表者間および参加者も交えた活発な意見交換が行われ、分野を超えた研究者間の交流が実現し、引き続き本研究テーマを深化させていくための貴重な機会となった。最後に、(3)本科研テーマの研究成果を掲載するWEBサイトの更新を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大年順子、劔持淑、寺西雅子	4. 巻 5
2. 論文標題 岡山大学GTECを用いたCan-Doリストの開発	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 44-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18926/61607	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 寺西雅子	4. 巻 1
2. 論文標題 英語系 英語本利用状況の報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岡山大学全学教育・学生支援機構基幹教育センター外国語教育部門英語系令和元年度活動報告	6. 最初と最後の頁 24-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 那須雅子	4. 巻 46
2. 論文標題 オーラルヒストリーによる外国語学習法に関する質的研究： アジア地域で活躍するグローバル人材のインタビューからの考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 PERSICA	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 那須雅子
2. 発表標題 外国語学習者・グローバル人材のナラティブ
3. 学会等名 科研費成果発表会－ナラティブ研究の実践と応用－
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Azumi Yoshida, Masayuki Teranishi, Takayuki Nishihara, Masako Nasu
2. 発表標題 The Influence of L1 on L2 Proficiency: A Stylistic Analysis of English Writings by Japanese EFL Learners
3. 学会等名 Poetics and Linguistics Association (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田安曇、寺西雅之、西原貴之、那須雅子
2. 発表標題 教育文体論を用いたライティング分析 - 日本人EFL学習者の母語と外国語習熟度の関連性を探る
3. 学会等名 日本国際教養学会 第9回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 那須雅子
2. 発表標題 オーラルヒストリーによる英語学習法に関する質的研究：「精読本を多読」する実践の考察
3. 学会等名 日本国際教養学会 第9回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大年順子、劔持淑、寺西雅子
2. 発表標題 岡山大学GTECを用いたCan-Doリストの開発
3. 学会等名 第3回JAAL in JACET (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 那須雅子
2. 発表標題 日本人の語学習得に関する質的アプローチ：英語学習履歴のナラティブ分析と考察
3. 学会等名 日本英文学会中国四国支部第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 那須雅子
2. 発表標題 オーラルヒストリー研究：アジア地域で活躍するグローバル人材に必要とされる「能力」について
3. 学会等名 日本国際教養学会 第7回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masayuki Teranishi
2. 発表標題 Integration of Liberal Arts and EFL: Principles and Aims of JAILA New Textbook Project
3. 学会等名 2018 International Forum on Liberal Education (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 日本国際教養学会英語教材プロジェクトチーム	4. 発行年 2020年
2. 出版社 成美堂	5. 総ページ数 96
3. 書名 The Intersection of Arts, Humanities, and Science	

1. 著者名 那須 雅子、坂本 南美、寺西 雅之、和田 あずさ、飯塚 晃三、秋山 容洋、長谷川 裕、久世 恭子、大西 好宣、劔持 淑、保坂 裕子、小比賀 美香子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学術研究出版	5. 総ページ数 178
3. 書名 ナラティブ研究の実践と応用	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>ナラティブ研究の実践と応用：現代社会への理解と貢献に向けて https://www.narratives-lab.com/</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	劔持 淑 (Kenmotsu Yoshi) (20178164)	岡山大学・全学教育・学生支援機構・教授 (15301)	
研究分担者	寺西 雅之 (Teranishi Masayuki) (90321497)	兵庫県立大学・環境人間学部・教授 (24506)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------